平成 22 年度フィリピン短期研修とマニラ動植物園

加藤　雅彦

フィリピン短期研修は、加計学園、順正学園などの加計グループの学生から参加希望者を募って海外の提携大学に派遣する短期研修の一つである。このフィリピン短期研修の場合、主たる目的は、フィリピン大学ロスバニョス校獣医学部（University of the Philippines Los Banos –College of Veterinary Medicine; UPLB-CVM）の見学であった。スケジュールは次のとおりである。

平成 22 年
8 月 28 日：福岡出発、マニラ着
8 月 29 日：マニラ動植物園見学、アラヤ博物館見学
8 月 30 日：マニラ発、ロスバニョス着。UPLB 見学
8 月 31 日：UPLB-CVM 授業参加、UPLB 見学
9 月 1 日：UPLB 見学、BIOTEC 見学、ライスセンター見学、
ロスバニョス発、マニラ着。CVM マニラ動物病院見学
9 月 2 日：マニラ発、福岡着

このうち、博物館に関する見学は、マニラ市内にあるマニラ動植物園、とアラヤ博物館、UPLB-CVM にある寄生虫センターと解剖学展示室、UPLB の近くにあるライスセンターであった。学生 15 名、教員 3 名の研修団であったが、私たちの専門が動物関係であることやスケジュールの都合から、時間をかけて見学することができたマニラ動植物園について、ここで紹介する。
なお、マニラ動植物園と同じ日の午後に見学したアラヤ博物館については、フロアごとに展示テーマが異なっていた。この博物館の見学における私たちの目的は、フィリピンの歴史の勉強であったので、フィリピン史をテーマとしている 2 階を中心に見学した。ここでは、フィリピン出身の本学講師デビッド先生が、古代から現代までのフィリピン史を説明してくださった。

マニラ動植物園は、マニラ市街の中心部に所在する。英語名は Manila Zoological and Botanical Garden であり、植物園を名称の中に加えているものの機能は動物園として経営している観を否めなかった。しかし、実際、植物のコレクションもある。入場料は、マニラ市民、大人 20 ペソ（1 ペソ＝約 2 円）、小人 10 ペソ、マニラ市民以外はそれぞれその倍の金額、であった。この園の公式サイト（http://www.manilazoo.org/）を見ると、1959 年開園、敷地面積 5.5 ヘクタール、約 500 個体の動物を飼育し展示している。種類別で述べると、哺乳類は 30 種、爬虫類 63 種、鳥類 13 種、計 106 種の動物を飼育し展示している。植物の展示栽培もあわせ、国の教育拠点の一つと位置付けている。
各展示動物種について、表示が掲示されていた。表示は現地語が一切なく、すべて英語で、必ず表 1 の事項が記載されていた。

また、この表示とともに「警告！不要な事故を防ぐため動物から離れること。動物には餌を与えないでください」が必ず掲示されていた。

飼育施設やケージの中では、動物に対するエンリッチメントが施されていた。ウィキペディアフリー

一般名
学名（属名、種名）
形態
分布
生態
食餌

表1 展示動物に関する掲示

百科事典（http://en.wikipedia.org/wiki/Manila_Zoological_and_Botanical_Garden）を見ると、この設置はこの園に対する批判に応えたものらしい。

この園において最も目につく動物は、何といってもやはり入場口近くのアジアゾウであった。日本で見るアジアゾウより体格が大きく見え、アフリカゾウと見間違える可能性もあるほどであった。ただ、残念なことに、アジアゾウは1頭しか飼育されていないようであった。このアジアゾウと並んで注目に値する動物は、ベンガルトラであり、こちらは多数飼育されていた。また、カバも目を引いた。霊長類では、フィリピンザルとニホンザルの双方を展示していた。霊長類の研究者にしてみれば、さぞうらやましいところであったと思えた。比較すれば、ニホンザルの顔がいかに赤いかが直ぐに分かった。爬虫類では、ワニとヘビが目を引いた。キリンおよびライオンを飼育していないこと、ならびに鳥類が少ないことは、フィリピンの国情を考えると無理からぬことであった。フィリピンと名のつく動物で気が付いたのは、前述のフィリピンザル以外にはフィリピンシカ、フィリピンコブラ、フィリピンクロコダイルであった。他にもフィリピン国内の動物を多く見ることができた。日本に近い国でありながら、こんなにも動物種の差が大きいことに改めて驚かされた。

実物の動物とは別に、剥製や模型の動物も展示されていた。ゾウ、キリン等の模型は実物大であり、これらの傍で写真撮影を行う来園者も多かった。

日本の動物園と同様に、遊具も園内に設置されており、動物に見飽きたと思われる子どもたちの多くがこれで遊んでいるのが見られた。

この園の中には池があり、池の中に島があった。池はボートで遊覧することができ、1回の乗船が5名までで60ペソであった。島にはワニや鳥類の模型が配置されていた。

園内には、グッズを販売する店が何軒かあり、動物を模したぬいぐるみなどのおもちゃは、筆者の観察する限りテナガザル、鳥、およびヘビであった。その他、飲食物以外ではTシャツ、帽子、笛、おもちゃのギターなどが販売されていた。

“KINDER ZOO ADVENTURE JUNGLE”と称するコーナーがいくつかあり、ここでは実際の動物に触ることができた。日本の動物園でいう「動物とのふれあいコーナー」や「動物ふれあい教室」といったものに相当しそうであるが、実際に触る動物がヘビであったりオウムであったりするため、第一の趣旨は物珍しさの体験であろうと思われた。そういうことだから、もちろん、補助に園のスタッフが就いていた。なお、オウムの場合、触ることから始まって最終的に肩に乗せる、という体験であった。入場料とは別にヘビには100ペソ、オウムには75ペソ支払わなければならなかった。

以上の説明からお分かりのことと思うが、途上国にある動植物園でありながら、十分楽しめるところであった。